

令和5年度インクルーシブ教育保育研究 「Springプロジェクト」研究報告



静岡県幼児教育センター
令和6年2月14日（水）

インクルーシブ教育保育研究「Springプロジェクト」(R4～R6)

全ての子どもたちのWell-Beingをめざして、外国にルーツをもつ幼児や発達に特性のある幼児に対し、ソーシャルワークや特別支援教育、言語指導等の専門性を有する人材を活用しながら、園内の支援体制の構築、幼児へのアセスメントと保育プログラムの開発、小学校への円滑な接続の在り方等を、異なる施設種で調査・研究し、幼児期から支援を開始することの教育的効果を検証するとともに、全ての施設で活用できる保育プログラム等を開発する。

研究モデル園

沼津市内の公立保育所・私立保育所
私立認定こども園

パイロット園

沼津市内の公立幼稚園
磐田市内の公立幼稚園・公立認定こども園・私立保育所

《研究柱1》

園(組織)としての支援体制確立

《保育ソーシャルワーカーを活用した支援体制構築》
(モデル園に月1～2回訪問)

- 園の支援体制に関するコンサルテーション
 - ・外部関係機関と園をつなぐ
 - ・ケース会議・保育者研修等への参加
- クラス運営に対するコンサルテーション
 - ・基礎的環境整備への助言
 - ・合理的配慮への助言
- 保護者支援に対するコンサルテーション
 - ・子育て支援
 - ・保護者と園と外部関係機関をつなぐ

《研究柱2》

幼保小の円滑な接続を図る
保育プログラムの開発(大学との協働)

《インクルーシブ支援員(個別指導員)を活用した個別指導の充実》(モデル園に週1回訪問)

- 言葉の獲得等に躓きのある幼児に対し、個別指導を実施し、対象児の学びや育ちを調査
- 《5歳児クラスにおける保育プログラムの実施》
(パイロット園等で担任等が週1程度実施)
- 言語能力(学習の基礎スキル)の発達特性をアセスメントし、その結果を踏まえ、保育者が言葉遊び等の保育プログラムを週1程度実施。
 - 対象児の小学校での育ちを追跡。

《研究柱3》

幼児教育施設と小学校の連携体制整備

《幼児教育施設、小学校、家庭をつなぐ情報伝達のツールを開発》

- 保育プログラムのアセスメント結果を活用し、園での支援と家庭での子育ての連続性を図ったり、小学校へ必要な情報を伝えたりするためのツールを開発
- 《幼児教育施設と小学校で支援の連続性を担保する連携体制の構築》
- 保育ソーシャルワーカー等を活用した幼小の連携強化
 - 職員同士、子ども同士の交流の充実

研究の流れ

一年目

- ・実態把握
- ・人材活用による園の支援体制構築
- ・個別指導開始と保育プログラム開発

二年目

- ・人材活用による支援体制強化
- ・保育プログラム案の開発
- ・支援の連続性を担保する幼小接続ツールの開発

三年目

- ・対象児追跡(幼→小)
- ・効果検証、まとめ
- ・周知(シンポジウム等開催)

研究推進委員会の設置

研究を推進する組織として研究推進委員会を設置し、研究の3つの柱について、各研究モデル園の実態に即した成果と課題や改善の方向性等を協議する。各モデル園(関係小学校)で年間2回ずつ計6回開催する。

(研究リーダー) 常葉大学准教授 赤塚めぐみ氏 (スーパーバイザー) 尚絅学院大学特任教授 小池敏英氏

(研究推進委員) 研究モデル園代表者、関係小学校代表者、沼津市教育委員会指導主事、静東教育事務所幼児教育担当

県立沼津特別支援学校特別支援教育コーディネーター等

* 研究推進委員会の他に、年度途中に保育プログラム実践園(モデル園・パイロット園)等の情報交換会、年度末に研究推進地区(沼津市磐田市)での研究報告会の開催。

研究柱 | 園（組織）としての支援体制確立

《研究内容》

- 幼児教育施設の特性を踏まえた保育SWの活用を研究
- 幼児教育施設における保育SWの活用効果の検証

《活用人材》 **保育ソーシャルワーカー**

ソーシャルワークやカウンセリングのスキルをもつ有資格者

《R5年度実績》

- モデル園訪問（R5.4～R5.12）
47回（月1～2回訪問）

対応内容

子どもの行動観察（訪問時は、ほぼ毎回実施）

保護者面談 30%

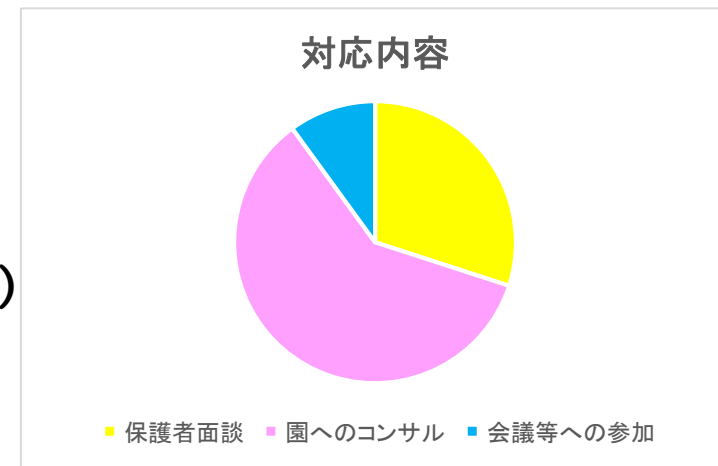
園・保育者へのコンサルテーション 60%

園内会議への参加 10%

- 情報収集、伝達のための外部機関訪問 4回

訪問先

関係小学校 4回



《活用事例》

●園の支援体制に関する

コンサルテーション

- ・園職員との話合い（情報収集・共有、助言）
- ・園内会議への参加（ケース検討、個別指導対象児・気になる子について協議、提案・助言）
- ・外部関係機関と園をつなぐ

《活用事例》

- クラス運営に対するコンサルテーション
 - ・ 基礎的環境整備、合理的配慮への助言
 - ・ 保育者支援・カウンセリング
(課題等の整理、助言、情報収集・共有)
- 保護者支援に対するコンサルテーション
 - ・ 子育て支援・カウンセリング
(課題等の整理、情報提供、助言)
 - ・ 保護者と園、外部関係機関をつなぐ

《活用効果の検証》

- モデル園関係者のアンケート
- 保護者の感想
- 研究推進委員会における協議内容



研究柱Ⅰ 園（組織）としての支援体制確立

保育者より



- 子どもへの関わり（声かけ、姿勢、意識）が**肯定的**になった。**子どもの姿を捉える視点も広がった**ように思う。
- 保育の悩みを聞いてくれたり、対応や援助について、肯定的な意見をくれるので、**モチベーション、意欲の向上**につながっている。
- 保護者に対して、**担任からは話すことが難しい内容を専門的な知識のもと対応**してくれて、**保育者の精神的負担が減った**。
- 保護者の面談も**より深いものになった**と思うし、**小学校との連携も取りやすくなった**。

- **保育者が多くのことを学ぶ**ことができ、**積極的に子どもや保護者に関わる**ことができた。特に**子どもの見方、接し方、受け止め方等に変化**が見られた。
- 園に定期的に訪問してくれてアドバイスをもらえて本当に助かった。関わる子どもも先生たちも救われる。今回の研究のように、**ワーカーが定期的に各園や小学校を訪問する仕組み**があるとありがたい。

モデル園長より

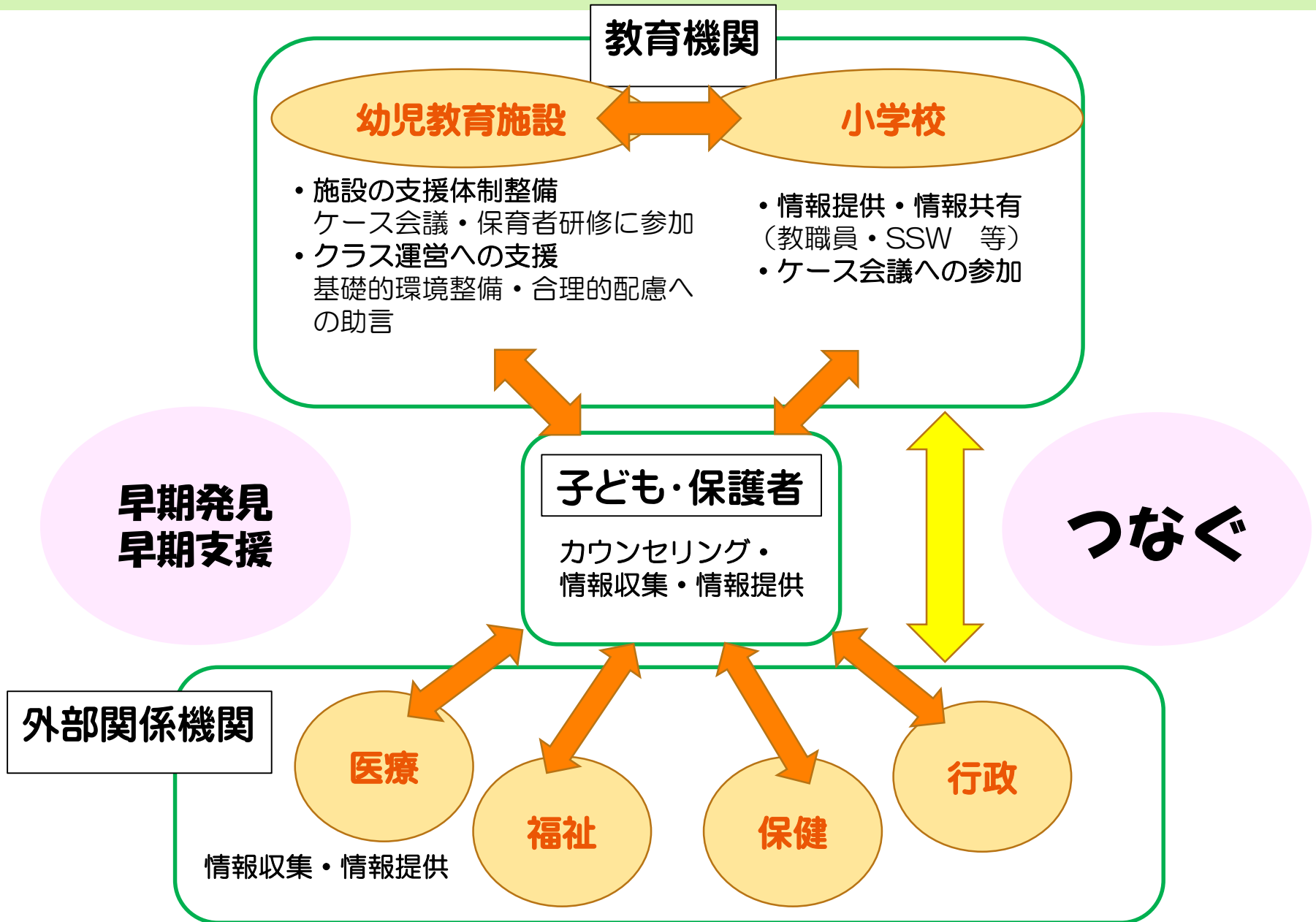


保護者より



今回のプロジェクトでは、保育園で通常保育の時間内で個別指導を受けられ、保護者が専門機関へ送迎する必要がないというところがありがたかったです。また、**保育園に専門家が来所するということは、普段から対象児との保育をする保育士と専門家のコミュニケーションもとれるというのが、最大のメリット**かと思っています。通常であれば、専門機関から指示された対応等を保護者がいったん受けて、その中でできそうな対応を保護者が保育園に依頼するという流れになるかと思います。そうになると、保育園は外部の情報を保護者からまた聞きすることになるので、正しい理解が得られない可能性があります。専門家が保育園に来所することで、**専門家、保育園、保護者の三者がそれぞれ相互に意見交換ができ、子どもの状態と対応方法について考え、成長を促すことができた**と思います。

保育ソーシャルワーカー 活用モデル



成果

- ・ モデル園への支援体制が充実
(目的を共有することで…)
 - **子どもの成長、保護者の安心**につながる
 - 保護者への支援は、**園と保護者の関係を深めることの一助**に
 - 保育者の**専門性、資質・能力の向上**につながる
 - 園以外の関係者との連携が円滑になった
- ・ 幼児教育施設の特性に応じた活用の仕方が明確化
- ・ 外部専門家を園運営に生かすことのよさを実感

課題

- ・ 保育SW活用効果の共有
- ・ 最適な訪問回数、訪問時間の検討

《研究内容①》

インクルーシブ支援員（個別指導員） を活用した
個別指導の充実

《R5年度実績》

- 一人につき週1回
30～40分程度の指導
- 7人の幼児に指導を実施
内訳
5歳児…6人
4歳児…3人

《指導事例》

5歳児（男児） 個別指導2年目
（インクルーシブ支援員・森下より）

研究柱2 幼保小の円滑な接続を図る保育プログラムの開発

保護者より

子どもの状態をアセスメントしていただき、苦手だった言語能力を伸ばす取り組みをしていただいた結果、年中から年長にかけて、子どもの会話能力、語彙が格段に伸びました。プロジェクト参加の期間中、**保護者である私も子どもの発達について学び、日常的にかかわるクラス担任、加配担当の保育士ともコミュニケーションをとりながら、子どもの成長を促すかわり**をしてきました。クラスの保育士も子どもの対応について積極的に考え、取り組んでいただき、今の子どもの姿があると思っています。



保育者より



- アドバイスを受け、**すぐに保育に生かしている**。
- 遊びの中から言葉や身に付けたい力を習得する方法を知ることができ、**自分の保育の引き出しが増えた**ように思う。
- **対象児は、毎回指導を楽しみにしている**。
- 対象児は活動の切り替えが**スムーズ**になったり、かんしゃくを起こす回数が減った。また、**友達が増えた**。
- わっぴょんノート（インクルーシブ支援員と保護者、園の連絡帳）を使うことで**様子が分かり、保護者も安心**している。

成果

- 早期の実態把握、個別支援の有効性が認められた対象児は個別指導の時間を楽しみにしており、生き生きと活動している。
集団での活動においても情緒面の安定（活動に対する興味・関心、自分なりの工夫など）が見られる。

課題

- 個別指導、支援法の確立
- 園、保護者との情報共有の方法・時間の確保

《研究内容②》

保育者にできる保育プログラムの開発（大学との協働）

常葉大学保育学部
准教授 赤塚 めぐみ 氏

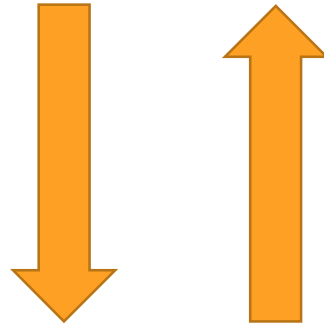
保育プログラム

- ・ アセスメント法
- ・ 保育教材（遊びプログラム）
- ・ 小学校への支援接続ツール



《保育プログラム開発の取組》

赤塚先生によるアセスメント（3回）・分析



モデル園・パイロット園の保育者による遊びプログラム案の実施

モデル園・パイロット園より

子どもの表れ

- 回数を重ねるうちに子どもから出される単語のバリエーションが増えている
のが分かる。
- 子ども同士で自発的に遊びが展開されている。
- 楽しい雰囲気できている。
- △雰囲気で参加している子もいる。
→理解できていない子を集団の中で見つけるのが難しい

実施の工夫

- 給食待ちや移動での待ち時間等の隙間時間で実施
- 帰りの会だと集中力が切れてしまうので、朝の会に変更して実施
- 全体でやるときには発表できない子もいるので、少人数で取り組むこともある。
- 言葉が挙げられない子もいるので、例を出したり、ボードにかいて共有したりしている。
- 子どもの状態に応じて遊びを選んでいる。

成果

- ・ 保育プログラム（遊びプログラム案）の効果（赤塚先生より）
- ・ 保育者にできる保育プログラム案の作成

課題

保育者による保育プログラム案の試行、効果の検証

《研究内容》

- 幼児教育施設、小学校、家庭をつなぐ情報伝達のツールを作成
- 幼児教育施設と小学校での支援の連続性を担保する連携体制の構築

《実績》

- 支援接続ツール案の作成
(R5年度末に関係小学校へ送付予定)
- 保育SW、インクルーシブ支援員が幼小連絡会等に参加
 - ・ R5.4 幼小連絡会 (小学校 2 校)
 - ・ R5.5 研究推進委員会 (小学校 2 校)
 - ・ R6.2～ 幼小連絡会 (小学校 5 校訪問予定)
- 園から小学校へ情報伝達
↓
小学校管理職による
園訪問へ (情報共有)

幼保小接続の体制モデル

教員の交流

子どもの交流

- **連絡会 (小)**
1年生授業参観
新担任との懇談

5月

- **合同研修会 (幼)**
保育参観・協議 等

7・8月

- **公開授業参観 (小)**
授業参観・協議 等

10・11月

- **入学説明会 (小)**
- **連絡会 (幼)**
年長保育参観
情報共有

2・3月

- **運動会見学 (小)**
- **年長児小学校訪問 (小)**
授業参観・施設見学 等

- **入学体験 (小)**
年長児と1年生の交流 等

☆ **保育SW・
インクル支援員
同行**

**園からの
情報提供
↓
保育参観等**

☆ **保育SW・
インクル支援員
同席**

研究柱 3 幼児教育施設と小学校の連携体制整備

小学校教諭より



- 幼児教育施設での様子や指導について細かく伝えてくれてありがたかった。
- 事前に情報をもらっていたことで、担任として準備することもできたし、保護者と共通理解することもできた。
- 幼児教育段階から、保育SWとつながっていたり、個別指導を行っていたりしたことで、入学後、小学校での支援について保護者との話がしやすく、スムーズな支援につながった。

小学校管理職より

• 幼児教育段階から保育SWとつながっていること、園での情報を得られていることから、保護者へのアプローチがしやすかった。

• 顔の見える関係になり、分からないことはすぐに電話で聞けるようになった。



成果

保育SWが橋渡しをすることで、モデル園と関係小学校との連携が強化

課題

- 支援接続ツールの検証
- 合同研修会の実施等、連携体制の構築

R5

人材活用による
園内の支援体制構築

小学校への円滑な接続の
在り方

保育プログラム案の開発



R6

幼児期から支援を開始することの
教育的効果の検証



すべての子どもの
Well-Beingを

